

学校 教育 目標	校訓「自己を高めよう」をめざし、知、徳、体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てる  <めざす生徒像> 「将来を見据え、今の自分を作り上げていく生徒」 ・真剣に学び合う生徒 ・けじめのある行動をする生徒 ・自ら心と体を鍛える生徒	経営 理念	<使命> 「自立した大人になるための基礎づくり」 「自立」…経済的、精神的な自立に加えて「学び」の自立を含む。 また「孤立」ではなく、他者と相互に関係をもちながら自己を実現していく姿と考える。 <経営展望> (中期経営目標) 「南中文化の向上」 学校に協力的な南中学区の地域文化を基盤に、生徒の将来の自立に向け価値のある生徒文化と教師文化の質の向上を目指す。
----------------	---	----------	---

1 評価計画 (中期経営目標を設定して6年目)【「☆」今年度も継続して重点的に取り組み項目】

<b>◆経営展望 (中期経営目標) 実現に向けての現状 (進捗状況) と今年度の位置づけ</b>	
a	<b>【教師の授業力向上 (教師→教師)】</b> ・中堅教員の層が厚くなったことで、教員同士が互いに学び合う南中の教師文化の中で新任、若手教員を育てていく基盤ができつつある。 ・市教委委嘱研究指定の2年目にあたる本年度は、教員集団自らが教科の枠を越えた部会において指導案検討などを通して「学び合い」の達成感や充実感を実感していくことで「学び合い」の価値を理解していく。それをふまえた上で、生徒が集団で課題を「学び合い」で解決していく単元構想を練り合ったり生徒主体の学び・深い学びがある授業実践を積み重ねたりして、将来の自立した学びにつながる授業を追究する1年とする。
b	<b>【学級経営力の向上 (教師→生徒)】</b> ・学校行事、学年行事において、学級担任がリーダーを育て、支えていこうとする方向性は定着しつつあるものの、「級訓を核とした学級づくり」に関して、教師と生徒との意識の開きがある。 ・「級訓」「学級目標」を明確にし、全ての生徒が帰属意識、有用感の感じられる集団を育てていく。そのために、一人一人の個性を生かしながらリーダーとフォロワーを育て、集団としての成長につながる学級づくりを計画的に進めていく1年とする。
c	<b>【集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上 (生徒→生徒)】</b> ・「生徒自身が課題を解決する力」の育成に生徒会、室長会の取組が大きく寄与している。特に室長会の取組については、学年に定着してきている。一方で、生徒会が主体となる学校行事以外の活動において、課題解決力の育成という視点が乏しい。 ・生徒議会の役割として、学校の諸問題の解決を付加し、学級、学年、委員会と連携した取組を進めていく。そして、学級担任一人一人が「ファシリテーター」としての役割を再自覚し、「生徒自治」の精神を学級づくりにも継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーやフォロワーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会・場を学級にも保障していく1年とする。
d	<b>【まちづくりへの協働力・貢献力の向上 (地域⇄生徒)】</b> ・学区のまちづくり協議会をはじめ、さまざまな地域の支援者に本校の学校経営が支えられている。そのことを実感しているのは一部の教職員のみにとどまり、その結果、生徒にも主体的な「地域貢献」の思いが高まらない。全教職員・全生徒にどのように支援を周知し、どのようにして感謝の思いや成長の姿を見せていくのかを取り上げていく必要がある。 ・教職員があらためてまちづくりへの協働の意識を自覚し、地域の一員でもある中学生として、生徒が「自分たちでもできる地域貢献」を考えられるように、「まちづくり」の一役を学校としてどのように担っていくことができるのか模索していく1年とする。
☆	<b>【特別な支援を要する生徒への支援・指導】</b> ・通級指導教室、日本語指導教室、適応指導教室など、特別な支援を要する生徒に対する指導・支援体制が整いつつある。 ・個々の生徒への指導のあり方や各担当職員と学級担任との連携のあり方など、よりよい指導・支援のあり方を模索していく1年とする。
☆	<b>【勤務時間の縮減】</b> ・勤務時間外労働の月80時間超、100時間超が昨年度より減少傾向にあるものの以前無くならない現状がある。 ・勤務時間管理については時間外勤務の数値目標が示された。今年度も事務長を長とする「業務改善推進委員会」を中心として、勤務における無駄を減らす具体的な方策を示し、取組を進めていく1年とする。

2 学校経営の軸に対する考え方

a	<b>【教師の授業力向上 (教師→教師)】</b> 公開授業と授業だよりの執筆、全体授業と協議会、論文の執筆と読み合わせ会を通して、教科や学年の枠を超えて教職員同士が「 <u>集団で課題を解決する場のある単元構想</u> 」「 <u>生徒主体の学び・深い学びの場がある授業</u> 」について、学び合える場を大切にする。ベテラン・中堅教師の知識と技が、若手教師に受け継がれていく南中の教師文化を創造・継承しつつ、新たな役割の中でそれぞれの教員が力を発揮できるようにする。
b	<b>【学級経営力の向上 (教師→生徒)】</b> どんなに優れた授業実践をしても、学習集団が未熟であれば、「深い学び」となることは期待できない。また生徒に健全な社会性を育むためにも、生徒たちの集団づくり・仲間づくりに対する的確な指導支援ができるよう、担任がファシリテーターとしての役割を意識しながらリーダーシップを発揮し、 <u>目標に向けて協働できる集団 (仲間) づくりに迫る</u> 「学級経営力」を向上させたい。
c	<b>【集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上 (生徒→生徒)】</b> 「課題を発見し解決する力」が、将来を生きていくために最も重要な力であると考えている。これまでリーダー育成や生徒自治について重点的に取り組んできたことを生かし、 <u>授業、学級、生徒会活動や部活動など、学校生活の様々な生徒集団の中で、生徒が主体となって計画・運営・評価の過程を経験できるようにすることを目指している。上級生から下級生に受け継がれてきた生徒文化を内容・質共に向上させていきたい。</u>
d	<b>【まちづくりへの協働力・貢献力の向上 (地域⇄生徒)】</b> 中学生も地域の一員として地域づくりに貢献する中で、地域の方々と中学生が交流していけば、地域への愛着も増し、将来自分の住む地域について考えて行動できる大人になると考えている。高取・南部まちづくり協議会、高浜市文化協会等、地域の諸団体からの協力は、南中学校にとって貴重な財産である。ここ数年で、高取まちづくり協議会、高浜市ロータリークラブ、NPO 法人アスクネットと協力団体は広がってきている。さまざまな地域の支援者に本校が支えられていることを教職員、生徒共に自覚し、支援や活躍する場を提供していただいていた立場から、生徒から「 <u>中学生のできる地域貢献</u> 」をはたらきかけ、積極的に関わりを求める立場へと転換していきたい。

3 本年度も、重点的に取り組むことに対する考え方

☆	<b>【特別な支援を要する生徒への支援・指導】</b> 軽度の発達障がいをもつ生徒、日本語以外の母語をもつ生徒、集団生活に不安をもつ生徒が増加しており、学校生活や学習における特別な支援・指導のニーズが高まっている。個々の生徒が抱える困り感を理解し、彼らが安心して学校生活を送れるよう、望ましい支援・指導のあり方を模索していく。
☆	<b>【勤務時間の縮減】</b> 長時間に及ぶ勤務時間外労働が常態化しており、人的措置がなされない中での勤務時間削減は限界がある。管理職から示されること以外にも業務の中に削減、縮減できるものがないかを、教職員自身の目で見直し、具体的な提言ができるようにする必要がある。

4 各目標達成のために  
 (1) 教師の授業力向上 (教師→教師)

中期経営目標	a 教師の授業力向上 (教師→教師)					
短期経営目標	◇ 生徒主体の学び・深い学びの場がある授業実践を積み重ねることで、「学び合い」の質を高め、「学び合い」を通して学ぶことの達成感・充実感を感じさせる。					
目標達成のための方策	成熟度による成果指標	元年度	☆取組指標 ○成果指標 (予算関係)	評価基準		
				達成値 目標値 (A 基準)	観点別 評価	総合 評価
○主題研の4部会毎に「学び合い」の視点で主題に沿った単元を構想し、授業実践する。  ○集団で課題を解決する場のある単元構想を構築するために、生徒の思考の流れを汲んで、追究課題を意図的に配列する。  ○「学び合い」の質を高めるために、生徒の思考を支える発問・板書の工夫をしたり、対話の質を高める働きかけの工夫をする。  ○授業参観者用シート、「授業だより、授業メモ」で南中のめざす授業を示し、相互参観・執筆を通じて授業力を高める。	◆自分の思いや考えを発信する授業		○南中学学習スタンダードの中の「話し合い」に関するアンケートの「はい」「概ね」の全体に占める割合 ・生徒教師のアンケート結果 (はい、概ねの合計値) A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 59%未満  ○教師の授業参観シート A評価の割合(2.5点以上) ・教師の相互評価 A: A評価 70%以上 B: A評価 50%以上	教師アンケート	A	B
	4段階	生徒がもちよった考えを基に、話し合いが成立し、生徒の思考に深まりができています。		82.9		
	3段階	多くの生徒が根拠を示しながらの話し合いに参加し、思考に広がりができています。		80		
	2段階	一部の生徒の発言は活発だが、話し合いが広がりや深まりがない。		生徒アンケート		
	1段階	話し合うために必要な知識等が習得できていない。		84.9		
	◆基礎学力の習得		☆教職員研究実践 評価 (南中研究のまとめ : 公費 31,900円) ・教育研究論文 A: 応募10本以上 B: 応募9本以下  ☆授業便だより発行数 A: 発行5回以上 B: 発行4回以下  ○中学校入学時(100)と比べた生徒の学力検査の割合 ・NRT・知能共にコロナの関係で休校期間にあり実施できず  ○NRT教科別得点分布 ・職員による分析結果 NRT 偏差値 A: 51以上 B: 50以上 C: 50未満 ・上の理由により実施できず	参観シート集計	B	
	4段階	基本的な知識や基礎的な技能を、仲間と関わりながら習得したり、互いに学び合いながらクラス全体で身に付けていこうとする。		61.7		
	3段階	基本的な知識や基礎的な技能を、繰り返して欠いたり、声に出したりしながら自ら進んで身に付けようとする。		70		
	2段階	基本的な知識や基礎的な技能を、教師が主導しながら身に付けようとする。		市論文応募者		
	1段階	学びに対する意欲が見られず、基本的な知識や基礎的な技能を身に付けようとする姿が見られない。		4本		
			授業だより数	A		
			30回			
			学力検査結果 (入学時と比較) ・2・3年生共に実施できず		—	
			・国語	—		
			・社会	—		
			・数学	—		
			・理科	—		
			・英語	—		

(2) 学級経営力の向上 (教師→生徒)

中期経営目標	b 学級経営力の向上 (教師→生徒)					
短期経営目標	◇ 級訓を核とした学級経営を行い、個々の個性を生かしながら、集団の目標に向けて協働しようとする生徒を育てる。					
目標達成のための方策	成熟度による成果指標	元年度	☆取組指標 ○成果指標 (予算関係)	評価基準		
				達成値 目標値 (A 基準)	観点別 評価	総合 評価
<p>○学年訓や学級訓をもとに室長会を柱に据え、生徒が自分で考え、行動できるようにする。</p> <p>○応援合戦、合唱コンクールをはじめ、学校生活全般において級訓を意識した取組、振り返り、評価を行う。</p>	◆帰属意識・有用感の感じられる集団づくり		<p>☆「仲間づくり」の様子、経過が分かる学級掲示がされている。</p> <p>・学級掲示 A：全学級 (19 学級) B：18 学級以下</p> <p>○「級訓」「学級」に関わるアンケート結果の「はい」「概ね」の全体に占める割合の平均</p> <p>・生徒教師アンケート A：80%以上 B：70%以上</p> <p>○学年、学級担任、分掌担当による生徒の振り返りの「肯定的」な内容の割合の平均</p> <p>※生徒アンケートと記述内容より</p> <p>○年間出席率 (6月～1月) ○年間無遅刻率 (6月～1月) A：98%以上 B：97%以上 C：96%以上 D：96%未満</p> <p>○年間長期欠席者率 A：全国平均 (3.9) 以下 (※1年度現在) B：県平均 (4.3) 以下 (※1年度現在)</p>	学級掲示 全学級実施	A	<b>B</b>
	4段階	生徒リーダーを中心に、学級の全員が自主的に運営に参画することができる。		79	B	
	3段階	教師の支援のもと、室長、団長等の生徒リーダーが中心となって、話し合い活動ができる。		80	B	
	2段階	グループの中で、司会等の指示を出せば、自分の思いや考えが正直に話せる。		71	B	
	1段階	グループになっても、自分の思いや考えが言えない。		80	A	
<p>○不登校生徒の現状と指導方針を共有し、学校復帰、学級復帰に向けた支援をみなみ部会を中心に組織的に展開する。</p> <p>○通級指導のあり方を検討し、実態に即した支援体制を確立する。</p> <p>○外国籍生徒の現状を把握し、日本語指導教室担当を中心に、市通訳、SSを活用しながら細やかに対応する。</p>	☆特別な支援を要する生徒への支援・指導		<p>☆学級担任、教科担任から支援・指導について申し出がある。</p> <p>・支援・指導の要請該当生徒数</p> <p>○みなみ、通級、日本語支援の担当への協力 アンケート (満足、概ね満足の割合) A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：50%以下</p> <p>○該当生徒の満足度 ※生徒、担当者への聞き取り</p>	【校内適応指導】 1年：5名 2年：5名 3年：5名	A	<b>A</b>
	4段階	特別な支援を要する生徒が、適応指導や通級指導、日本語指導などによる支援体制により困り感を低減できている。				
	3段階	特別な支援を要する生徒の居場所が確保できている。				
	2段階	特別な支援を要する生徒が、困り感の解決の場として、適応指導教室、通級指導教室、日本語指導教室の存在を認識している。				
	1段階	特別な支援を要する生徒への人的支援があっても生徒の困り感に対応できていない。				
				【市適応指導】 1年：1名		
				【通級指導】 1年：7名 2年：2名 3年：1名	A	
				【日本語指導】 1年：15名 2年：3名 3年：3名	A	

(3) 集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上 (生徒→生徒)

中期経営目標	c 集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上 (生徒→生徒)						
短期経営目標	◇ 「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会・場を保障する。						
目標達成のための方策	成熟度による成果指標	元年度	☆取組指標 ○成果指標 (予算関係)	評価基準			
				達成値 目標値 (A 基準)	観点別 評価	総合 評価	
<p>○生徒議会・生徒総会の質を高め、室長会や委員会との連携を強化することで、生徒スローガンと全体計画をふまえた活動にしていく。</p> <p>○生徒会活動や室長会に関して、担当職員が「ファシリテーター」としての役割を再自覚し、「生徒自治」の精神を継承・発展させていこうとする考えに基づいて支援していく。</p> <p>○学年目標の達成に向けて室長会を運営し、決定した諸取組を学級へと広げていく。</p> <p>○外部団体、小学校と連携したリーダー研修会を運営し、部長会へ繋げる。</p>	<b>◆主体的に動くプロジェクト活動</b>			<p>○生徒会・委員会活動に関するアンケート (満足、概ね満足の割合)</p> <p>A : 80%以上 B : 70%以上 C : 60%以上</p>	教師アンケート	A	A
	4段階	生徒会スローガンを軸に、生徒会役員や委員会の生徒が、互いに連携し合って常時活動や生徒会行事を企画運営し学校全体にはたらきかけている。	91.4				
	3段階	生徒会スローガンを軸に、生徒会役員や委員会の生徒が、各領域でアイデアを出し合って常時活動や生徒会活動を企画することができる。	80				
	2段階	生徒会役員や委員会の生徒が、生徒会活動や行事の意義を見だし、活動を考えることができる。	生徒アンケート 73.9				
	1段階	生徒会役員や委員会の生徒が、生徒会活動や行事の意義を考えていない。	80	担当教員の振り返り	A		
	<b>◆よりよい学年を目指す室長会</b>			<p>○担当教師による振り返り (活動のねらいを達成できている記述の割合)</p> <p>○プロジェクト活動に関するアンケート (満足、概ね満足の割合)</p> <p>A : 80%以上 B : 70%以上 C : 60%以上</p> <p>・今年度はコロナ感染防止の観点からプロジェクト活動を実施せず</p>	教師アンケート	—	
	4段階	学年のリーダーが自分たちの学年の問題を見だし、改善に向けて具体的な方策を立て、主体的に学年全体に働きかけることができる。	—		—		
	3段階	学年の問題について解決のための方策を考え、実行に移すことができる。	80		—		
	2段階	学年の問題の解決のために教師が示した解決策を実行することができる。	生徒アンケート		—		
	1段階	現状に満足し、学年の問題が認識できていない。	80		—		
			<p>○室長会に関するアンケート (満足、概ね満足の割合)</p> <p>A : 80%以上 B : 70%以上 C : 60%以上</p>	教師アンケート	A		
4段階	学年の問題について解決のための方策を考え、実行に移すことができる。	91.2		A			
3段階	学年の問題の解決のために教師が示した解決策を実行することができる。	80		A			
			<p>○室長、担当教員の振り返り (活動のねらいを達成できている記述の割合)</p> <p>○リーダー研修会に関する各アンケート</p>	生徒アンケート	A		
4段階	学年の問題について解決のための方策を考え、実行に移すことができる。	93.6		A			
			今年度は実施せず	—			

(4) まちづくりへの協働力・貢献力の向上 (地域⇄生徒)

中期経営目標	d まちづくりへの協働力・貢献力の向上 (地域⇄生徒)						
短期経営目標	◇まちづくりへの生徒の主体的なかかわりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。						
目標達成のための方策	成熟度による成果指標	元年度	☆取組指標 ○成果指標 (予算関係)	評価基準			
				達成値 目標値 (A 基準)	観 点 別 評 価	総 合 評 価	
<p>○生徒会や美化委員会が、外路ボランティア活動、防災訓練を計画・運営・参画する。</p> <p>○本校が様々な地域の支援者に支えられていることを教職員が自覚し、まちづくりへの協働の意識をもち、「まちづくり」の一役を学校としてどう担っていきけるかを考察する場を保証する。</p> <p>○ホームページ、ブログ等で学校の方針、活動のねらいと生徒の様子を積極的に情報発信する。</p> <p>○スマホ対策講演会やリーダー研修会において地域と協働する機会を継続する。</p>	<b>◆ボランティア活動を通じた地域貢献</b>		<p>○ボランティア活動の参加生徒数 A：全校の 60% 以上 B：全校の 50%以上 C：全校の 49%未満</p> <p>○ボランティアに関するアンケート A：全校の 80% 以上 B：全校の 70%以上 C：全校の 60%未満</p>	参加生徒数 313人 591人	B	<b>B</b>	
	4段階	進んで参加し、心のこもった活動をする。参加する大人と一緒に活動できる。					
	3段階	進んで参加し、まじめに活動をする。					
	2段階	進んで参加はするが、まじめに活動できない。					
	1段階	人に言われて消極的に参加する。					
	<b>◆よりよい南中をめざす情報発信</b>		<p>○ホームページに関するアンケート結果 A：全校の 80% 以上 B：全校の 70%以上 C：全校の 60%未満</p> <p>○年間ブログ閲覧者数 (1日平均) A：200 以上 B：100 以上 C：100 未満</p>	教師アンケート 51.5 80 保護者アンケート 59.0 80	C		
	4段階	ホームページを見て学校支援の申し出がある。					
	3段階	各種たよりやホームページに目を通す保護者や地域の方が多い。					
	2段階	各種たよりやホームページの更新等、情報発信を積極的に行う。					
	1段階	各種たよりが保護者の手に渡らずホームページもほとんど更新されない。					
			☆スマホ対策講演会、リーダー研修会に対する参加者の振り返り、地域関係者の感想	今年度は実施せず			
<b>☆勤務時間縮減に向けた取り組みの推進</b>		<p>☆業務改善委員会 年間実施回数 A：3回以上 B：2回 C：1回 D：0回</p> <p>○業務改善の提案数 (1回平均) A：20以上 B：10以上 C：5以上 D：4以下</p> <p>○月別平均在校時間の合計時間数 (9月～12月) との前年度比 A：10%以上減少 B：10%未満減少 【参考】 R 1 / 261.0 時間 H 30 / 272.5 時間</p>	2回	B			
4段階	業務改善委員会の提案により業務が改善され、在校時間短縮につながる。						
3段階	業務改善委員会の提案により業務が改善されたが、在校時間短縮にはつながらない。						
2段階	業務改善委員会の提案により業務改善されたが、在校時間が増加する。						
1段階	業務改善委員会の提案がなく、委員会が機能していない。						
<p>○業務改善委員会を立ち上げ、職員自らが業務を見直し、削減・縮減の提案をする。</p> <p>○地域団体の代表者やPTA 役員等を通じて、地域や保護者に学校の実情を発信し、勤務時間縮減の取組について理解の促進を図るとともに、協働して取組を推進する。</p>			12	B			
			R 2 / 260.4 時間	B			

後期の分析結果・解釈

<p><b>a</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全体研授業や部会研授業の際には、4部会ごとに協議が活発に行われていた。授業者からも「他教科教員よりさまざまな視点からの意見が授業づくりの幅を広げられた」との声を得られた。</li> <li>一人一人の公開授業に対しては、4部会での動きは見られなかった。4部会や教科部会を機能させるためには、4部会と教科部会の役割や一人1授業公開の指導案検討を誰がどのように進捗管理をするのかなどを再確認していきたい。</li> </ul>	<p><b>b</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「級訓」を核とした学級づくりについて、未だに担任と生徒との意識の差はあるものの、学校行事だけでなく委員会活動や室長会企画等を通して、生徒自身が自分の学級についてさまざま考える機会が増えていったのと考え。</li> <li>学校教育目標により迫るためには、学級経営は学校行事だけでなく、日々の学校生活のあらゆる場面が学級経営の機会と捉え、意識を高くもち続けるよう、担任に働きかけていく必要がある。</li> </ul>	<p><b>c</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校行事を充実させるための取組や年度末の学年学級納めに向けての取組に関する室長会が随時行われており、室長を中心に学年を動かすという意識も実績も満足できる段階である。また、企画の段階から生徒の手に委ねられている面も多く見られ、リーダーを養成するという点からも効果を上げている。</li> <li>委員会活動の質的向上を図り、単なる当番活動ではなく、教師が何のために活動するのかという観点に立ち、目指す生徒の姿をふまえた指導方針を見直す必要がある。</li> </ul>	<p><b>d</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「地域に支えられている」という実感をどのようにもたせ、「まちづくり」への協働の意識をどう高めるのか、日頃の教育活動の中で、どう意図的に場作りをするのが課題である。ボランティア活動に検定せず、年間を通して点と点をつなげていけるような場を設定できるとよい。</li> <li>保護者が学校からのどんな情報を求めているのかという視点と、学校の教育方針を理解してもらうためにという視点との両面で、情報発信していきたい。</li> </ul>
<p>・研究推進部の地道な活動により、生徒同士の「学び合い」を大切にした授業づくりが増えてきている。また、学校行事や室長会企画においても、生徒の考えを中心にして学校生活を創り上げていこうとする機運が高まってきている。本校の研究テーマである「学び続ける南中生」をふまえた取り組みが、授業の枠にとらわれず学校教育活動全般にわたって、生徒一人一人に丁寧に考えさせる場作りにつながってきていると考える。その一方で、今年度も経営展望に掲げる「南中文化の向上」を目指して取組を進めてきたが、「学校に協力的な南中学区の地域文化」を職員や生徒に実感させることが難しかった。いかにして校内の活動だけでなく地域に意識を向けさせるか、さまざまな教育活動の計画において位置づける必要がある。</p>			

次年度の方針・方策の方向性

<ul style="list-style-type: none"> <li>職員各自が学校教育目標に掲げられている意味を丁寧に理解し、本質的な部分の達成に向けて、これまでの取組を進め方の面で見直し、段階的に取組を進めていく。</li> <li>市教委委嘱の研究発表会を翌年に迎えるにあたり、研究主題に基づいた授業実践を計画的・意図的に展開し、成果を蓄積していく。</li> <li>教員相互の「学び合い」から生徒相互の「学び合い」の質が一層深まるように、研究組織の機能を向上させ、授業力の向上につなげていく。</li> <li>生徒自身による課題解決力の育成を目指し、学校行事、学年行事・活動の目標設定や評価の視点を明確にし、順位などの結果のみにとらわれない成就感、満足感を教師、生徒共に感じられるようにする。</li> <li>地域に支えられていることを生徒が実感できるようにし、生徒が意欲をもって地域貢献できるように活動の内容や方法の見直しを図る。</li> </ul>			
<p><b>a</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究組織の機能向上に向け、4部会と教科部会の役割を明確にし、一人1授業公開においても連動させていく。</li> <li>一人1授業の指導案検討が確実に進められるように、4部会長と教科主任が担当教科の公開日を把握すると共に、進捗管理の役割を明確化していく。</li> <li>何のために「学び合い」をさせるのか、どのようにさせるのか、どんな考えをもたせたいのかなどを念頭において、「活動あって学びなし」にならないように、必要感のある場にしていく。</li> </ul>	<p><b>b</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>担任と生徒との意識の差はあるものの、学校行事はもちろん、委員会活動や室長会企画等を通して、生徒自身が自分の学級について考えたり振り返ったりする機会が増えたので継続していく。</li> <li>学級経営は学校行事だけでなく、日々の学校生活のあらゆる場面が教育活動の場と捉え、どのように取り組む姿が望ましいのか、その活動を通して自分たちはどうありたいのか、担任として、意識を高くもち続けて働きかけていく必要がある。</li> <li>不登校の背景となっている多様な事案に対して、適切な支援ができるように、研修の充実を図る。</li> </ul>	<p><b>c</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「自治活動」のとらえについて再確認していく必要がある。</li> <li>特に、委員会活動については、単に当番活動をさせるだけでなく、その活動を通してどのような生徒を育てていきたいのかをふまえ、よりよい学校生活を自分たちで考え、判断し、実行できるような活動を実現する指導方針を見直していきたい。</li> <li>学校として目指す生徒の姿を考えていくとき、生徒会活動の質をより高めていくために、活動内容に応じて、委員会活動や当番活動、プロジェクト活動など、ねらいに応じた生徒組織のあり方なども再考したい。</li> </ul>	<p><b>d</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「街路樹ボランティア」が定着している反面、本校において「ボランティア活動＝街路樹ボランティア」という固定観念があるのかもしれない。「自分たちで学校生活を豊かにしていきたい」という自発的で自主的な活動を高めるため、生徒がその思いを出したり実現させる機会を話し合ったりする場を学級会や委員会、室長会などで保証していけるように教師が意識していきたい。</li> <li>本校が「地域に支えられ、地域に貢献する」ことを意識して学校づくりに取り組む以上、生徒・教職員がどのような方々にどのように支えられているのかを実感できる場を工夫していきたい。</li> </ul>

自己評価を踏まえての次年度の重点目標（案）※↓の上は2年度の重点目標 太字は次年度の重点目標（案）

<p>自立した大人になるための基礎づくり —南中文化の向上—</p>	
<p>a 授業力向上 「学び合い」を通して学ぶことの達成感、充実感を感じさせ、将来の自立した学びにつながる授業を展開する。</p>	<p>↓ 次年度も継続実践</p>
<p>b 学級経営力の向上 「級訓」「学級目標」を明確にし、一人一人の個性を生かしながら、集団としての成長につながる学級経営を行う。</p>	<p>↓ 次年度も継続実践</p>
<p>c 生徒自治力の向上 「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会、場を保障する。</p>	<p>↓ 次年度も継続実践</p>
<p>d まちづくりへの協働・貢献 まちづくりへの生徒の主体的な関わりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。</p>	<p>↓ 次年度も継続実践</p>